

洪仁玕と西方文明

内田 義男

序

十九世紀中葉、十五年間続いた太平天国革命は、それまで二千年にわたって、総計大小数百回を数える農民反乱とは、異質の面を所有し、以後の中国革命運動の出発点となった。従って、比較的、究明の度合が少ない中国近代史上において、この革命は当初から世界の注目と関心をあつめ、究明され続けている。この革命を、一八五六年の内訌を境に、前期と後期とに分けるならば、天王洪秀全の族弟洪仁玕は、後期における理論面での指導者の一人であった。洪仁玕は、香港・広東・上海等の都市にいた時、西方先進資本主義思想とキリスト教義とを身につけ、一八五九年、東京に到着し、まもなく、内政改革と資本主義経済国家改革方案である「資政新篇」を天王洪秀全に提出した。太平天国革命に対する評価が、単純農民革命説と資産階級性の農民革命説とにわかれ、対立することから、この「資政

新篇」に対する評価が兩派により決定的に異なり、平行線の關係で、意見の一致点をみいだせない状態にある。

ところで、「資政新篇」についての評価方面では、かなり多くの人で論じているにもかかわらず、洪仁玕が「資政新篇」を提出するにいたるまでの事情、その思想の入手経路、提案動機、また後期に参加した理由について、いまだ十分な説明がなされていないのが現状といえる。そこで、本稿では、「資政新篇」の内容を検討し、洪仁玕の伝記を追うことにより、洪仁玕の思想の源泉と、太平天国革命への参加動機と提案動機を明らかにして、太平天国革命評価の一助としたい。

一

一八五九年四月二十二日、東京に到達した洪仁玕は、年内のうち内政改革と資本主義経済国家改革方案である「資政新篇」を天王に提出した。到達後、数週間にして最高位に就いた

洪仁玕が、金田起義以後八年目に天京にやってきた理由は、第一には、金田起義により、取締りが厳しくて家居でできなかった為と、第二には、天京へ行って家中の苦難を告げ、いささか恩を寄せて天寿を終えよう、⁽³⁾というものであった。

しかしながら、彼自身は香港にいた時、もし天京へ到達出来たら二つの事をやるつもり、すなわち、一つは宗教の誤りを修正する事、一つは外人に対して調和という縁で実行する、⁽³⁾と言明しているので、全く意なくして革命に飛びこんだ訳ではない、といえよう。

それが、特別に目をかけられて干王に封ぜられてからは、「ただ力を尽くし忠誠を尽くして知遇の恩に報いよう」に変じ、頗る⁽⁵⁾発憤して香港等で経験したことを中心として「資政新篇」——国政に資する新しい書——を提出したのである。これだけの内容の書を、数カ月間で書きあげており、しかもその間、ほかに何もしていなかった様なので、⁽⁶⁾彼はやはり、香港等にいた時から、太平天国革命への献策を心に秘めていたといえよう。

洪仁玕は、香港等において西洋の学問を習い、西方資本主義思想を身につけ、当時の西方資本主義先進国家は、已に旧制度の改革と新技術を推進しているという事を知っていた。また、一八五六年の内訌以後、革命の形勢は漸次逆転して、内部の政治は離心をきたしていた。⁽⁷⁾だから、異姓不信で苦悩中の天王に、「方策を備陳し、聖聞を広め、聖主の知遇の恩に報いん」⁽⁸⁾

が為に、内政改革と資本主義経済国家改革案を提案したのである。天王の裁可を経てから木刻本となった。⁽⁹⁾

太平天国革命を、西方先進資本主義の道へと歩ませようとした洪仁玕は、はじめに「治国にはまず立政、為政には取資」⁽¹⁰⁾と原則を標榜した。この取資とは、「その要は時によりて宜しく制し、勢を審りて行うにある而已」⁽¹¹⁾ということであり、治国・立政・取資と一直線に西方先進資本主義国家をとらえて、実行せんとした所に、更にはそれが一八五〇年代という早期であった所に、この「資政新篇」の存在意義がある。

「資政新篇」の内容を大別するならば、「用人」と「設法」とに分かれる。そして治国には、この用人と設法に当を得いなければならず、その具体化として「おもうに用人不当ならば壞法、設法不当ならば害人」⁽¹²⁾という事をあげ、用人と設法は並行して逆らわない、と主張した。この用人の具体化と「禁朋党之弊」の中の「もし結盟連党ということがあれば、弱本強末の弊を内蔵し、兵たる者がこれを行なえば軍法難行し、臣たる者がこれを行なえば君たる者の権謀を下が奪う」⁽¹³⁾とを合わせてみる時、明らかに当時、内部に生じた「解散したいという気持」と内訌に対して発せられた警句である。更に、「今、人心冷淡により、銳氣半減」⁽¹⁴⁾と「大から小、上から下に至るまで権を一に帰そう」⁽¹⁵⁾とを合わせてみる時、強力な中央集権体制でなけ

れば、現在の内部の好ましくない現実をのり切れぬ、と考へていたといえよう。しかしながら、洪氏集団と李秀成等の軍事指導者との対立は深まる一方であつた。⁽¹⁶⁾

設法とは法律・制度の制定の事で、具体的には風風類・法法類・刑刑類の三類である。風風類では腐敗した風俗習慣の改定を提案し、法法類とは新しい社会経済政治政策を実行する事であり、まず世界各国の情勢を論じ、次いで西方資本主義国家の政治制度を模倣した二十八カ条を列挙した。刑刑類では新しい刑法制度の採用を提案した。また、朋奸対策としては、「もし漏れてしまひ制止できなければ、かえつてその害にあひ、禍を残すことが浅くないので、秘かにその党を消し去り、形を露わさず」而して兵強国富、俗厚風淳の日以後は、「たとえ、ひととき詭害があつても、新聞で姦謀をあばき、暴露する」という方針であり、きたるべき日の自信をのぞかせている。これらの中で、法法類の二十八カ条が最重要視されているということには異論がない。⁽¹⁷⁾これらの最終目標、きたるべき日とは、「兵強国富・俗厚風淳」に中国を至らしめることにある。⁽¹⁸⁾

二

「資政新篇」を書いた洪仁玕とは如何なる生涯をおくつたのか、及び、洪仁玕の思想の源泉、そして太平軍への参加動機と提案動機を究明してみたい。

洪仁玕、一八二三年二月十八日生れ、号を益謙、字は吉甫で、広東花県官禄埗の生れ。洪仁玕の前半生は不明である。従つて、同族である洪秀全のそれを参考にする。二人は同じ程度の生活環境と知的能力をそなえていたらしいから。洪秀全の父は長老であつた。しかし、生活は苦しかったらしく、洪秀全の非凡な才能は世間にひろく知られていたにもかかわらず、学業をうちきつたことがあつた。十八歳のとき、塾の教師になつた。何回か科挙に応じたがいずれもだめであつた。二十三歳の時、広東で「勸世良言」をもらひ、後にこの書がもとで、キリスト教を信じるようになる。一八四三年、洪仁玕を改宗せしめ、洪仁玕は教義の研究と布教活動にのりだす。その間、洪仁玕も主として清遠で教師を勤めていた。一八四七年、二人は広東市に赴き、宣教師ロバートに師事してキリスト教を研究したが、ロバートの助手のねたみと陰謀にあひ、洪仁玕は家に留まつて医師を学び、洪秀全は広西へ旅に出た。⁽¹⁹⁾

洪仁玕自述によれば家に帰つてから一八五〇年まで、教師をしながら、科挙による出世を望みつつ、洪秀全と長年交遊起居していたとおもわれる。

一八五〇年、洪秀全が金田村に近親連を呼び寄せたとき、洪仁玕は友人達のすすめに従つて行を共にせず、教師として雇われていた。しかし、一八五一年、再度の洪秀全のよびかけにより、この時以後、太平軍へ参加すべく行動を開始する。このこ

とは、清朝側の取締りがきびしくなり、家居できなくなつた為とみるのが一番妥当のようである。つまり、積極的に、自らすすんで太平軍への参加を志ざしたのではないということである。従つて、太平軍への「獻策」ということはまだなかつたといえよう。

一八五〇年、洪秀全が金田村に呼び寄せた時、そのまま参加していれば問題はなかつたであらう。しかしながら、洪仁玕が意志薄弱、優柔不断であつた為、参加の行動を開始した時はすでに遅く、五回も六回も出発しては挫折し、やっと八年後にして天京へ到る。これに対して、洪秀全・馮雲山のごときは、一人でキリスト教の布教活動にのり出し、多大な効果をおさめていたのである。洪仁玕は、二十才をすぎても、親戚の人々から反対されればそれに従い、以後他県の教師となり、キリスト教を信じているにもかかわらず、塾では生徒に孔子崇拜を許していたり、また、数年間に洗礼を施した員数も、五・六十人というだけであつた。それに、ロバーツの中国人助手に対する洪仁玕の行動からは、どうみても革命事業をやりぬく不屈の精神は感じられない。それどころか、金田起義以前は、科挙による出世を望みつつ、同時に洪秀全とも長年交遊起居し、彼の革命思想に耳を傾けるという、二足のわらじの生活をおくつていたのである。それが、金田起義以後は清軍側の搜索頗る嚴重となり、嫌疑者は容赦なく逮捕され、安心して家居できなくなつた。

できなくなると、やっと太平軍への参加の行動を開始した。その開始した動機というのも、逮捕を恐れたということのほかに、参加することにより、榮華と富貴を共に楽しみ得るようになるといふことと、科挙に應じても洪秀全と同様合格せず、清朝体制下では立身出世の途は閉ざされていたといふことがあつた。金田起義は実に、二足のわらじを両断して、一方への全面化をせまり、結果としては太平天国革命側になつたが、決してはじめから、自らすすんでそうなつたのではないといふことがいえる。九歳年長の従兄洪秀全でさえ已に金田起義の十四年も前に、科挙による榮達のみちは閉ざされていたことを知りながら、それでもなお、科挙に應じていたといふのは、如何なる考へであつたのであらうか。

「自分が災厄にあわせた人々を救うためには喜んで生命を投げ出すつもり」というくらいお人好しの洪仁玕が、行動をおこす時には殆んど友人がついてまわる。記録には指導者の存在となつてゐるが、それは彼の学問と洪秀全の従弟という事がそうさせたのであつて、彼の力量といふことからではあるまい。一人では行動できず、「君達は逃げ給へ。そして生命を全うし給へ。私はここで死のう」というくらい初期洪仁玕は意志薄弱であつた。

洪仁玕の外国の友人とは、殆んど宣教師であり、広東や香港で知りあつた人々であつた。一八五四年上海から香港へ引き帰

すまでの主な外国の友人とは、ロバーツとハンバーク⁽²⁶⁾であるが、二人からは主としてキリスト教義、特にハンバークからは、天文・歴史等の学問を学び、文明の利器をもらったり、上海から東京へ一八五四年に行こうとした時も、汽船に乗ったり、西方の文明に接してはいた。しかし、一八五四年段階では、いまだ「西洋の学問を輸入して中国を文明富強の国にしよう」という事を太平天国革命に献策する内的要請は洪仁玕自身になく、外国の友人、宣教師は、キリスト教の布教が第一目的であり、洪仁玕も教義の研究と洗礼が当面の関心事であった。そして、太平軍にしても、五四年段階では優勢に駒をすすめており、内部の団結も崩れていなかったのである。

三

一八五四年、洪仁玕はスエーデンの宣教師につれられて香港へ汽船で帰る。そして五八年まで香港にいたのであるが、この間の詳しいことはほとんど不明であった。ただ、「香港のロンドン伝道会でキリスト教の教師、伝道師としての務めを行っていた。直情径行、情熱にとむ気質であったから、すぐキリスト教に改宗した」という程度しかわからなかった。しかし、シノロジスト James Legge⁽²⁸⁾の伝記の中に、洪仁玕に関して一章さかれているので、香港での洪仁玕の様子が多少くわしく知り得るようになった。

香港の英華書院長レグに、洪仁 (Hung Jen) として紹介され、そこで布教師として雇われる。「彼の性質には、特にひきつける何かしらがあった様である。というのは、英人と中国人の双方から全てに非常に好かれたからである。伝道において十分、全てに素晴らしい助手となった」⁽²⁹⁾。事実、「レグは、他の中国人には殆んど与えなかった様な、特別な愛情と熱狂的な感嘆を感じていた」⁽³²⁾。「彼が太平王 (洪秀全 著者注) のいここであるということは、まもなく香港中に知れわたり、多くの人々が彼のところにやってきて、南京の王にくわわる為、内部へ導いてくれと求めた。レグは反乱軍と何も関係を持つなと忠告し、紛糾から逃れていることを感謝すべきだといった。というのは、最初から、太平軍の指導者が守っている、どうしても嫌いな主義に対して不信と不賛成を示してしまっていたからである。しかし、洪仁自身の性格には、レグは大いに尊敬をはらっていた」⁽³³⁾。

一八五六年、改良主義者容闳⁽³⁴⁾は、アメリカ文明に深く傾倒して、エール大学に留学し、洗礼を受け、アメリカ人と結婚して、アメリカに帰化していたが、植民地化する祖国の運命をうれえ、一八五五年、志を持って帰国した。その年は広東でアメリカの宣教師と同居していた。そこは刑場に近く、容闳は、両広総督が太平軍を極めて残酷な手段で鎮圧し、処刑するのをそのまのあたりを見て、帰宅後、それを

暴君ネロの残虐や、フランス革命時の惨劇に比した後、太平天国の挙動を正当と許す、私は太平軍へ同情をあらわしたからには、今にも太平軍の為に響應にたちあがりたいたいと感想を述べている。⁽³⁵⁾

この容閼の思想の基本的なものは二つある。一つは、「教育計画」、一つは「西方文明により中国を文明富強の国にしよ(36)う」というものである。そして容閼の発憤は、「中国之腐敗情形」に対してはつけられたものである。また、「教育計画」を実行しさえすればよいという彼の論理とは、自分が、「教育を受けてからは理想は高く、道德の範囲も亦広くなり、ついに、この身の負荷は極めて重いと覚悟した」ということから、このことを中国国民全体にまでおし広げ、「身に無限の痛苦と無限の圧制を受けているのに、未だ教育を受けていない人は自覚が全くなく、もともと痛苦と圧制を受けていることを知らないのだ」と分析し、それに「知識が高くなった者は痛苦もますます多くなり、而して快樂はますます少なくなる。これに反して、知識がないほど痛苦は少くなり、而して快樂はそこで、ますます多くなる。快樂と知識は殆んど自然と反比例をなすではないか」と続け、そして、「他日、中国に教育が普及し、ことごとく公権私権の意義を理解したならば、その時、何人でも彼らの権利を侵害してくるものがあるれば、必ず胆力をふるって自衛するものなのだ」というものであった。彼の「教育計画」を押し

進めれば、一たび知識人となった者は、中国国民の為に、容閼のように内的要請として活動にたちあがるものである、と考えた所に容閼の幻想があった。

容閼の、もう一つの基本思想とは、「西方の學術を中国に灌輸し、中国を日々、文明富強の境に向わしめん」ということであり、これは、後の洋務運動に結びつく思想といえよう。この思想を具体化したものが、容閼が一八六〇年、天京内の千王洪仁玕を訪問した際提言した七事と、数年後に曾国藩に提言した四事である。⁽³⁷⁾

一八五六年・香港で会した洪仁玕と容閼は、天京での再会を約した。そして一八六〇年、容閼は太平軍を訪察する。その動機に、「太平軍中の人物いかん。彼らの挙動志趣いかん。果して新政府を創造して満州とかわる任にたえられるか」というものであった。洪仁玕は太平軍に対する感想を聞いた後、再三にわたって一緒にやっていかないと、勧誘するが、容閼はこれに対して「もともと先入観はない。亦、太平軍に投身して、むやみに道を同じくするつもりはない。ただ、昔の友人を探視しにき、数年来の日夜風雨のおもいを慰めようとおもうだけだ」とにえきらない態度を装っている。洪仁玕が、それでも尚どうかと問うと、「實際、ほかの目的はなく、ただ、やや天京の本当の情形をつぶさに得、伝聞の疑をとけば願いは已に足る」と答えるばかりであった。

本心を直接語らず、まわりからそれとなく語り、聞くほうでもたのみごとを聞いてやれない場合は、それとなく、否ということを手伝って伝えていくのが通常な中国人であつてみれば、兩人の会話から、兩人とも非常に真剣な態度であつたとうかがい知れよう。さすがに悪いとおもつたのか、容闕は、先の七事を提言し、「無論いかなる時でも、太平軍の指導者諸君が、もしわたしの談判の際提出した計画を実行すると決定されれば、わたしは必ずや奔走してまいります」とつけ足している。しかし、容闕の本心は、「深思靜慮してみると、この挙は粗末で、妥当でない策をきわめ、わたしの計画に及ばないとおぼえる⁽³⁹⁾」というものであつた。つまり西方文明に洗練された容闕にいわせれば、無智な貧民が大半を占める太平天国革命はあまりにも粗末であり、妥当な策がまるでなく、爆発の導火線でしかありえなかつた宗教の知識は、「淺陋簡單」におもえた。加えて當時太平軍は劣勢へと向かいつつあり、容闕は七事を提言するという程度で、参加の勧誘をていよく拒絶したのである。

ところで、洪仁玕が「西方文明を中国にとりいれて、文明富強の国にしよう」と考えだすキッカケとしては、自力で各種の工作を考えだすとか、西方文明の紹介書をみつけたすなど、いろいろな推測が可能であるが、各方面から検討してみることとする。

まず、「資政新篇」を読めば、当時の欧米の文明の発達程度

と酷似しており、全くそれらの直輸入ということがいえ、自分で考えだした方法でないということはまちがいあるまい。第二に、上記のとうりであるとなれば、誰かに西方文明の實際を紹介されるという線が浮かびあがってくる。しかしながら、「干王と章王は、地理と機械学に通曉していた。そのほか、西洋の文明と科学のありとあらゆる問題に関する挿絵入り参考書を所有し、たえずこれを勉強していた⁽⁴¹⁾」ということと、「彼は極めて地理を熟悉し、又機器工事について略識し、又西洋文明の優越を承認しており、各種の参考書を家蔵していた⁽⁴²⁾」ということをあわせてみると、第二の線だけでは不十分といえよう。そこで、第三として、洪仁玕自身が各国をまわり、体験し、紹介書をみつけたという線が浮かんでくる。そして、凌善清は、「太平天国野史」の中で、「仁玕至北英。復由英至日本。帰香港。渡海入粵⁽⁴³⁾」と述べているが、洪仁玕は外国にいったことがなかった、というのが今日の定説である。それに先にな彼の伝記を追ってきた時でも、香港でレッグの下、布教師をずっと続けていた。又、レッグ以前はハンバークの下にいた。洪仁玕自述には「遍遊各洋避禍⁽⁴⁴⁾」とあるが、この各洋とは香港上海海域を指すと解するのが一般的である。従つて、第三の線は全く可能性に乏しいといえよう。以上のように検討してきた結果、西方文明の紹介書を他人から紹介され、と同時に欧米文明國の實際の情況を紹介され

たという線が十分可能性大として浮かびあがってくるのである。

次に出てくる問題は、それでは他人とは誰か、及びリンドレー・フォーレストのいつている「参考書」はどうなったのかということである。「参考書」については、今日、全く知る手がかりはない。多分焼き捨てられたのではないか。次に他人とは誰か、であるが、結論からいえば容闕ではあるまいか、ということである。実際、「教育計画」という幻想と、「西方文明の学術をかりて東方文化を改良し、必ず、この老大帝国をして少年新中国へと一変しよう」という幻想をいだき続けた容闕が、一八五六年、洪仁玕と出会った時、この六才年長の知識人に、西方文明を語り伝え、書籍を紹介したのであるという事は、先の七事と四事とを「資政新篇」とくらべてみれば、また、レグの下、香港で勉学を積んでいた数年間に、太平軍への参加の気持は強まり、しかも、その数年間に誰かに紹介をされたであろうということであれば、非常に可能性大といわねばならぬ。恐らく、洪仁玕は香港で容闕と会った時から、兩人が天京での再会を約していることから、太平軍への参加の志を強め、且、太平軍への献策をおもいたったにちがいない。そうでなければ、レグの下、布教師として幸せな毎日を送っていた洪仁玕が、レグの留守を機会に、太平軍に参加するなという厳しい命令をふりきって天京に、金田起義以後七年もたってからか

けつけたという説明ができないではないか。

洋務運動への端緒が、この容闕と洪仁玕の二人にみいだされる訳であるが、「資政新篇」は太平天国革命の滅亡と共に中国からは抹殺され、かえって外人宣教師の手により持ち出されて外国に保存され、一九三六年に公開されたのであるから、中国で継承される余地はなかった。一方、太平天国革命に見切りをつけた容闕は、以後逆に曾国藩、李鴻章に接近し、先の四事を提言して洋務運動に大きな援助を与えた。洋務派に接している場合でも容闕は、「教育計画」を最重要の事としているが、洋務派は決して、資本主義の保護育成を促進して中国を近代化に導くという方針はとらず、李鴻章のごときは、官営工鉱業の育成、北洋海軍の建設、江南製造総局、輪船招商局、上海機器織布局、天津武備学堂の設立など洋務化の半面は促進したが、それは旧支配体制の維持と派閥拡大が第一の目標であった。結局は失敗に帰し、中国の政治経済の買弁化と半植民地化を促進し、要するに軍事工業と軍隊の近代化のみに熱中したことは周知の事実である。そこで容闕は、政府に対して鉄道をしく特権を請求した。しかし、中国の資本だけで、外人の援助は許さず、しかも六カ月以内という条件の下では、不可能であった。ここに容闕の計画は挫折する。以後、一八七二年留米学生と共にアメリカに帰るが、日清戦争に奮起して帰国し、一八九五年、康有為、梁啓超らと共に、共に変法維新運動に奔走

し、のち自立会会長として変法派最後の蜂起に加わり、その失敗後アメリカに渡ったきりになってしまふ。かくして容闓らの改良主義思想は幻想にうもれたまま潜在してゆくのである。

洪仁玕自身には大いに尊敬を払っていたレッグは、一八五八年、英国へ十八カ月間行かねばならなくなる。その際、先述のように、洪仁玕に対して香港に残り、反乱軍に参加せぬよう厳しい命令を下した。洪仁玕は迷った。しかしながら行商人に変装し筆墨紙類の荷物を持ち、東京入城に成功した。時に一八五九年四月二十二日。

四

洪仁玕は前期の軍事闘争には未参加であり、わずかに天王の族弟という縁故と、少々賢くさといふ理由だけで、はじめから軍師という高位に就き、朝臣は不服であり、洪仁玕自身もたびたび辞してはいるが受け容れられない。ここで、一八六〇年前後の洪仁玕の地位を検討してみたい。リンドレーは、「太平天国の首領たちの間に区別を設けることは、なかなか困難で微妙な仕事である。なぜならば、彼らの多くは同じようにすぐれていたから」といつてはいるが、強いて序列をつけるならば、「天王のつぎは、忠王、干王、章王、英王、⁽⁴⁵⁾翼王、贊王の請王が最も傑出していると言つてよいかもしれない」と控えめに序列している。一八六〇年の九月より忠王につき随つていた

リンドレーに天王の両兄が権力者であるという事が理解できていなかったのか、無能と認めて無視したのか定かではないが、武將忠王の筆頭ということば、リンドレーがつき随つた人ということばを割り引いても、上位であることにはかわりあるまい。干王、章王、贊王は主として朝綱執掌者であり、人となりは申し分ないようであり、リンドレーは高くかっていた。翼王は出走しているので、問題にならない。

忠王自身のみるところでは、「わが天王が第一に重用したのは幼い西王の蕭有和、第二に重用したのは天王の長兄洪仁発、天王の次兄洪仁達であり、第三に重用したのは干王の洪仁玕であり、第四に重用したのは天王の女婿のそれぞれ鐘、黄という姓の者であり、第五に重用した者が英王の陳玉成、六番目に重用したのがこの秀成であつた⁽⁴⁶⁾」ということであり、忠王はいささか不満らしい。しかしながら、二、三、四は洪一族であり、天王の異姓への猜疑を特に心配していた忠王であつてみれば、第四までの序列は当然であつた。第五に弱年の武將陳玉成が忠王の上位に位しているが、これは忠王の本心ではなからう。

また、同じく内部の黄文英の見解と併せてみると、やはり干王、忠王、英王の三人は拔群である。とりわけ干王にいたつては、奏事は干王の手を経てから奏上された、⁽⁴⁸⁾という事からみて、内部の者からは途中から参加してきて、なりあがつたという事から評判は良くはないものの、天王のおぼえめでたく、権

力はあつたといえよう。忠王、英王は下からたたきあげ軍を統率して勝利をおさめていたので、下からの人気は絶対であつた。が、天王の異姓不信ということがある結局、干王、英王、忠王は拔群中の同程度という事になろう。

一八六四年、天京を逃げ出し、幼天王を奉じて各地を逃げまわつていた洪仁玕は、八月末の湖州府放棄の数月前という非常時に至つても、バトリック・ネリスというこの誰かも知らなかつた英国人と会つた時、「いままでよい外国人に会つたことがない」といながらも、「自分とともに江西へ行く気があるか」と訊ねている。全く、最後まで情況を客観視できなかった人物と扱われても文句はあるまい。「新王朝にまつたく献身しており、生死を共にする覚悟⁽⁵⁰⁾」でいるにもかかわらず、何度もくりかえして、「自分は、尊い位を授けられ、大きな力を与えられてゐるにも抱らず、香港で土着人伝道助手として働かれていたときの方が、今よりもずっと幸福だつた」とグリフィス・ジョンに語っている洪仁玕の言葉は、「資政新篇」を提出しても、何ら実行されえない情況と、失望に対して発せられた本音であつた。そして、「香港から南京へ去つた目的はただ一つ、天朝の臣民に福音を説くことである」とグリフィス・ジョンに語っているが、これは、自分の献策が何ら実行されなかつたことに對する言葉である。洪仁玕の言葉と言動が一致しない例はフォーレストの「天京遊記」にもある。⁽⁵¹⁾

五

洪仁玕はその経歴からいって、外国人の知人が多く、天朝内でも、對外処理は彼が相当していた。それで、彼について外人が書き残したものは多い。しかし、その著者の大部分は宣教師であり、宣教師の立場からみれば開明的なキリスト教徒洪仁玕は、中国人として極めて稀にみる人物であつたに相違なく、それらの人々の感想を要約すれば、それは、「伝道雜誌⁽⁵²⁾」に代表されよう。同誌の中の、信頼、尊敬、氣立て、思いやり、誠実といった言葉によりあらわされる洪仁玕は、はたして大部分、彼の性格を形づくつていたものであろう。そして、宣教師からみれば、非常に好ましい中国人として目にうつたに相違あるまい。このことが、かくも好評をもつて多くの外国人、宣教師に印象づけられたのだと言明できよう。ところで、一步宣教師という立場から離れると、好評ばかりとはいえなくなる。その代表的一派である、上海英領事署通訳官フォーレストの言葉をかりよう。

「私は實際干王の人物が好きだ。……惜しいことに、彼の立志は甚だ高いが、天性は怠惰であり、面子を氣にする自尊心、中国人にありがちな隠瞞を好み、用術を好む性質が、彼の爽直摯誠の人格の成長の中にもあらわれている。……彼の自尊自大心は、彼の経験から得た一切の知識を毀滅している。」⁽⁵³⁾

という評であり、蓋し、この立志は高いが、天性怠惰、自尊自
大心、という一連の性格は、フォーレストが、彼の人格を好ん
でいたにもかかわらずこれまた洪仁玕の主要な一面であった。

だから、洪秀全が故郷を離れる計画をたてて、洪仁玕もつれて
いこうとした時、親戚の者にとめられると、それに従う気にな
り、また、金田起義の際、来るように促しても、参加しようと
せず、やっと八年目に遅ればせながら天京にたどりついたのだ
である。入京後も、常に天京にいたので一般の戦功ある親王に非
常に嫉妬され、「彼ははなはだしく迫られて、兵を率いて出征
せねばならなくなったが、乱れて收拾できなくなってしまい、
結局外国の鬼どもが天朝に無理無礼な要求を提出していると報
告して、前線から帰ってきてしまった」という位、軍事方面は
無能であった。実際、軟弱性は彼の主要な一面、革命性は彼の
次要な一面であったといえよう。

先に検討してきたように、一八五四年段階では、未だ献策す
る考えはなかった。それどころか、初期洪仁玕は参加により、
栄華と富貴を共に楽しみ得るように、という気持であった。そ
れが、香港で布教師として雇傭され、西洋文明にまのあたりに
接した。更には実際に渡米して、その文明富強ぶりを体験した
改良主義者容闳と出合い、意気投合し、天京での再会を約束し
た。為に香港に残り、反乱軍に参加せぬよう、という師レグ
の命令をふりきって、一度は迷ったものの、一路天京へと決意

をあらたにして出発した。そういった過程の内に、献策という
考えの源泉をみ、容闳との出会いの内に洪仁玕思想の発端をみ
いだしたわけであった。

おもうに、ここで問題となるのは、文明化するという献策の
目的だけで、皆から慕われ一カ月に十ドルで幸福であった洪仁
玕が、師の命令をふりきり、行商人に変装し、苦難をおかして
まで太平軍へ参加するという理由を説明しえるであろうかとい
うことである。このことを補うものとして、以下の事柄があげ
られよう。それは、一八五四年ごろ、すでに外人には太平軍に
対して二つの点が確立していたようである。一つは、反乱の宗
教は野性的そして冒瀆の熱狂へと走りつつある、一つは、彼ら
は外人への決然とした敵意の態度をよそおったということであ
る。⁽⁵⁹⁾ 師レグの下にいて、以上の二点を太平軍にとって危険と
感じた洪仁玕は、宗教の誤りを修正し、外人に対しては調和と
いう基本線を持つて実行する。換言すれば、「洪仁玕は、太平
天国の人々と、賢明に外人との友人関係の洗練ということにつ
いて相談する覚悟であった」。⁽⁶⁰⁾

結

以上のことから、次のことがいえよう。金田起義以前は、意
志薄弱という性格がつた、親戚の言をよいことに、太平軍
には参加する気持がなく、それよりは清朝体制下での栄華を夢

みていたが、科擧には合格せず、金田起義以後は、取り締りが嚴重で家居でできなかった為と、洪秀全から太平軍に参加せよ、という使者が何度も来ることから参加はするという決心だけはした。そして太平軍内で栄華と富貴を共に楽しもうと考えなおし、いざ出発はしたが、やはり取り締り嚴重で、太平軍にたどりつくことさえできない。そうしているうちに、ハンバークやレッグと知り合い、レッグの下、すきなキリスト教と西洋の学問を学び、布教師として皆から慕われ、尊敬され、一カ月に十ドルで幸福という生活を送っていた。元来、真面目で熱心な側面が一方では強い性格の洪仁玕は、師レッグの下にいて、先の二点を太平天国にとって危険と感じ、改良主義容閥の考えを聞いているうちに心がうごきだした。そこへ、師レッグが英国へ十八カ月間、行くことになった。すでに宗教方面、対外方面そして米国产化方面の三方面に考えるところあった洪仁玕にとって、師の留守は、彼の一生の転機となった。時に三十四才。ついに師レッグの厳しい命令をふりきって出発し、天京へ到着した。「資政新篇」に対する評価は、またの機会に譲ることとしたい。

- (1) 内証は「李秀成自述」に詳しい。同自述は「中国近代史資料叢刊太平天国（以下簡稱太平天国）第Ⅱに收録。邦訳は、大曾根純訳、「太平天国——忠王李秀成供状——」（世界ノンフィクション全集7、筑摩書房、昭和三十五年）がある。

以下、同邦訳による。尚、同自述の真疑をめぐり論議となったが、羅爾綱は「湘鄉曾氏藏忠王李秀成原供考証」（中国近代史論叢、第一輯、第四冊、正中書局）で、「所以我們認為忠王此供的真实性是無可疑的」と言明（同上書一三三頁）している。本稿では、同自述を全面的に真実と認めて、多分に引用した。

- (2) 「太平天国革命性質問題討論集」（景珩、林言椒編、三聯書店、一九六一、全四一八頁）。邦文では、小島晋治「太平天国」（筑摩書房「世界の歴史」十一、一九六一）がある。

尚、太平天国の名称は一定しておらず、日本では太平天国の乱、中国では太平天国革命がそれぞれ多数派。

- (3) 洪仁玕自述（太平天国Ⅱ八四六頁所収）

- (4) James Legge の娘 Helen Edith Legge 著「James Legge missionary and Scholar」（一九〇五、ロンドン、娘が手紙や話をもとにして書いた父の伝記）の「Chapter III The shield King of the Tai Ping Rebellion」九三頁。*The first was the correction of religious errors and the second, the prosecution of a line conciliatory to foreigners.*

- (5) 洪仁玕自述、八四六頁

- (6) 李秀成自述に「任命をうけてから、彼は一つの仕事もしない」（四二二頁）、「天王は自分の弟を任命して二カ月もたつのに一事も計ることがないのを見て」とある。

- (7) 一八五八年「国政は乱れ、蒙得恩、李春発二人は健在であつ

たが、たいしたこともできず、安・福両王（天王洪秀全の両兄）にけん制されていた」、「当時人はそれぞれ解散したいという気持ちをもっていた」（李秀成自述、三六六、三五五頁）

(8) 「資政新篇」五二三頁

(9) 洪仁玕遺著、王重民校録の序言（逸経、十七、一九三六——十

一）「是篇——資政新篇——流出海外、得以保存、隱藏英倫、早成絕本。數年前燕京大學教授許地山君曾鈔回一份、為羅家倫君所收藏、余在北平時曾親見之。迨後多人請求借閱、皆未得允、因羅君視為秘笈、宝之特甚。近始由王重民君由英倫得原文影印寄來、復得國立北平圖書館之許可在本刊發表。……中略……此書共廿七頁、為太平天国九年（一八五九）木刻本。既頒行広布、則國內或尚有原刊本亦未可知」。尚、洪仁玕は香港の James Legge にパンフレットを送っていた。

(10) 「資政新篇」五二三頁

(11) 同上書五二四頁

(12) 同上書五二四頁

(13) 同上書五二四頁

(14) 同上書五四〇頁

(16) 同上書五三二頁

内訂以後「天王の長兄洪仁発の安王と、天王の次兄洪仁達の福王を用いたので、朝廷の者は大へんいやがった。この二人は才能もなければ計画を練ることもなく、一途に自分の考えを固執した」。「童容海は私の部下の将であり、私のために

心を用いていたが、のち、ざん言にまじわされて私にそむいて逃げ去った。これは天王の次兄が告げ口をして彼を自分の部下にしようとはかり、ひそかにデマを放ったのであった」。

(17)

「私はみずから天王の御殿の下にいて、わが主と面談してすべての国事を処理したが、やがて天王は深く私を疑い、天京内の政治はみなこの兄の洪仁達に処理させ、重要な城門や要害の地はそれぞれ、みな洪一族が人を用いて巡察し管理していった」。（李秀成自述三四九、四〇五、四一八頁）

たとえば、鄒純著「太平天国制度初探」（増訂本三三頁、中華書局一九六三）「全書重心在于《法法類》」。

李競能著「論洪仁玕」（近代人物論叢。三聯書店一九六五）、「第二是所謂《法法類》。它是《資政新編》最主要的内容。」

(18)

「資政新篇」五二四・五二五頁。

(19)

Theodore Hamberg 著（ハンバーグ・漢名・韓山文・韓山明・スエーデン人）一八一九——一八五四）The Visions of Hung-siu-Tshuen, and Origin of the Kwang-si Insurrection（洪秀全の幻想と広西の乱の起源）一八五四年香港刊行。邦訳・青木富太郎「洪秀全の幻想」（昭和十六年十二月、生活社、全一五六頁）・漢訳、簡又文「太平天国起義記」（民國二五年・北京）。以下、青木訳による。

(20)

中国人助手が、洪兄弟のすぐれているため、雇われて、助手の地位を失なうのではないかと恐れ、策謀をめぐらしてきたので、洪仁玕は二度と広東市へ行かず、家に留まって医術を学んでいた。

- (21) 太平天国Ⅱ八四六頁・自幼読書、至二十八九歳・経考五科不售、習経史天文歴数。
- (22) 洪仁玕自述、八四九頁
- (23) 洪秀全の幻想、一五一頁
- (24) 同上書、一五二頁
- (25) 同上書、一五二頁
- (26) ロバート (Rev. Isacher J. Roberts) 米国人宣教師。漢名、羅孝全。バプティスト派。一八三六年中国に来、広州に住む。五三年、天京へ出發、六〇年十月十三日着。于王洪仁玕の顧問的存在として羽振りをきかしていた。
- (27) 註一九参照。尚、ハンバークは、一八四七年バーゼル福音教会の宣教師。洪仁玕は叛乱勃発後、官憲の圧迫に堪えず、一八五二年友人と共にハンバークのもとに到つて、その世話になった。その時彼はハンバークにこの書（洪秀全の幻想）の内容を形づくる物語を語り、そのメモをわたした。
- (28) 「余は彼等のために書籍数種その他を贈った。即ち旧約、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人の翻訳せる新約各一冊「初学篇」(Bible History)・葉納清 (Ferdinand Genah) 氏の「聖会大学」・歴書、世界地図、支那地図、その他の望遠鏡、寒暖計、磁石等である」洪秀全の幻想三頁。
- (29) リンドレー著「Ti Ping Tien-Kwob; The History of the Ti Ping Revolution, including a Narrative of the Author's Personal Adventures」(2 vols. London: 一八六六) 邦訳・増井経夫・今村与志雄訳『太平天国』全四冊（平凡社
- 刊・昭和三九・四〇年）リンドレーは一八六〇年から六三年まで主として忠王李秀成にしたがつていた。郭廷以によれば、太平軍に極めて同情を表わし、つとめて英国の干渉政策に抵抗した。帰英後、本書を著わしたが、偏見多く、事実また、あやまりが多い。多くは信じられない、とある。しかしながら、ハンバークの著作が洪仁玕の前半生を知る唯一の書物であるのと同様、外人のみた太平軍として重要な文獻であることにはかわりない。以下邦訳による。二巻二二七頁。
- (30) 註四参照。
- (31) H. B. Lings 著九二頁
- (32) 同上著九二頁
- (33) 同上著九二頁
- (34) 清末の改革運動者、一八二生。自伝 Yung Wing, "My Life in China and America" 一九〇九。漢訳、徐鳳石、惲鉄樵「西学東漸記」全二章、商務印書館、民国四年、全一四八頁
- (35) 「西学東漸記」三七頁
- (36) 具体的には、「悪根実種於満洲政府之政治。最大之真因。為行政機関之腐敗。政以賄成。上下官吏。即無人中賄賂之毒」(「西学東漸記」七一頁)である。
- (37) 一、依正当之軍事制度。組織一良好軍隊。
二、設立武備学校。以養成多数有学識軍官。
三、建設海軍学校。
四、建設善良政府。聘用富有經驗之人才。為各部行政顧問。
五、創立銀行制度。及釐訂度量衡標準。

六、頒定各級学校教育制度、以耶蘇教聖經列為主課。

七、設立各種実業学校。

(西学東漸記) 六六・六七頁

(38) 一、中国宜組織一合資汽船公司。公司須為純粹之華股。不許外人為股東……以下略。

二、政府宜選派頭秀青年。送之出洋留学。以為國家儲蓄人材。……以下略。

三、政府宜設法開採礦產以尽地利……中略……即間接以提倡鐵路事業也。……以下略。

四、宜禁止教会干涉人民詞訟以防外力之侵入。……以下略。(同上書一〇〇—一〇三頁)

(39) この本文は一八五五年、刑場からの帰宅後の感想であるが、前後の情勢判断により、一八六〇年の太平軍訪問の際の感想でもあるとみてさしつかえあるまい。

(40) 容闕のこの見方は、段々とキリスト教が太平天国内に於いて、表面にでてこなくなることを考えるのに一つの示唆を与えてくれる。そして、三石善吉は、「洪仁玕の思想を、このように宗教は単なる外衣にすぎないとして、キリスト教精神を無視したところで論ずるのは、誤りなのではないか」(東京支那学報・十三、一九六七年六月)と主張する。

(41) リンドレー著、「太平天国」2、六二頁。

(42) フォーレスト著、天京遊記(太平天国Ⅲ九五五頁)

(43) 「西学東漸記」一〇四頁

(44) 「洋務派が中体西用論・附会説などにより、何とか表面をと

りつくろいながら欧化に進んだのと鮮やかな対照をなす」として、「侯外廬の論するように、欧化をもつてするものを見て曾國藩、李鴻章的な洋務と考えるのはどうであらうか」という論者(三石善吉)もあるが、洋務派が軍事の近代化をあゆみ、容闕・洪仁玕らは資本主義産業の保護育成により、中国の近代化を目指したという相違はあっても、文明富強の国を目指したという点では変らず、よって、洋務運動への端緒と考える。

(45) リンドレー著「太平天国」2、六〇頁。

(46) 李秀成自述三八〇頁

(47) 「那天朝的王有五等・若從前的東・西・南・北四王翼王、現在的主王執掌朝綱、是一等王、若英王・忠王・侍王執掌兵權、是二等王」黄文英自述(太平天国Ⅱ八五七頁)

(48) 「要奏一件事・還要駁兩道手鑑到主王手裏、主王准奏纔奏上去」同上自述八五七頁

(49) リンドレー著「太平天国」3、二二一頁

(50) リンドレー著「太平天国」2、一三三頁

(51) 同上書一三三頁

(52) 同上書一三三頁

(53) フォーレストは次のように觀察している。「彼はキリスト教を堅信しているが、同時にその信仰を(中国の)特殊な習慣と遷就(なれあい)している。」天京遊記(太平天国Ⅲ九五六頁)

(54) リンドレー「太平天国」2、三四頁

- (55) 天京遊記
- (56) 同上書
- (57) 王永康は「革命性は彼の主要な一面、軟弱性は彼の次要な一面」と主張している。（「論洪仁玕及其資本主義改革思想」史学月刊一九五七年五月）
- (58) H. E. Legge 著九五頁
- (59) 同上書九七・九八頁「In a letter from my own pen in July 1854, I wrote—Two points seem to be established; first, that the religion of the insurgents is running into a wild and blasphemous fanaticism; and second, that they have assumed an attitude of determined hostility to foreigners.」
- 同上書九八頁「My old friend Hung Jin, the Shield King, was prepared to counsel them wisely as to the cultivation of friendly relationship with foreigners.」
- (60) H. E. Legge 著86頁